

おはようございます、白馬様

作・山崎玲子
絵・山本啓太



この山にきて、はじめての夏休みがはじまった。ぼくたちはこの春、東京からここに引っ越してきた。

ここって、日本一高いところにある村なんじゃないかなあ。なにしろ、目の前にギザギザした日本アルプスのてっぺんが見える。

真夏でも雪が残った白馬^{はくば}の山は、他の山とはちがって、見ていると背筋がピンとのびる。

おとうちゃんは町にある自動車整備工場へ車で一時間かけて通い、おかあちゃんは車で三十分かけて下の町のスーパーまでパートに行っている。

ねえちゃんとぼくと妹の由紀^{ゆき}は、夏休みなのにこんな山の中で行くところもなく、家でぶらぶらしていた。

お昼に夕べのカレーの残りを食べおわるころ、風とともに

に雨が降りはじめた。生あたたかい風が不気味に網戸から侵入してくる。

「翔^{はつ}、二階お願い！」

ねえちゃんが庭の洗濯ものを家に放りこんでいる。「うん」と返事をして、階段をかけあがり、窓を閉める。まわりの山は、すでに雲におおわれている。

裏の畑のじいさんがトマトの棚が倒れないように、支えの棒を結わえつけていた。こわっ。あのじいさん、なんか苦手。

ぼくたちのことを、「住宅の子ども」とよぶ。

住宅というのは、村営の移住者住宅のことだ。年寄りばかりの村になって、住んでくれる家族に家を安く貸してくれるんだって。